

「我百首」をめぐる

—フオガツター—の小説と第26首—

林 尚孝

すきとほり眞赤に強くさて甘き

Niscioire の酒二人が中は (26)

鷗外の「我百首」の第26首は、赤ワインを思わせる Niscioire の酒を詠み込んでいて、外国人女性との濃密な恋愛を連想させる歌である。「我百首」は、鷗外が四七歳であった明治四二(一九〇九)年五月一日発行の『スバル(昴)』に掲載された。その異様な内容は、最初の一首を見ただけで納得できる。

斑駒の骸をはたと抛ちぬ

Olympos なる神のまとゐに (1)

日本神話、ギリシャ神話を連想させる第1首から、キリスト、陣痛、釈迦、道教の神女

を詠み込んだ第6首までのように、「我百首」には理解できない歌が並んでいる。Niscioire、Olympos などの横文字が使われているだけではない。引用符や句読点を用いるなど、それまでの短歌にはない斬新な試みが随所に見られる。

これまで何人かの研究者が、難解きわまる「我百首」に触れているが、いずれも、百首の連関を説明することが出来てはいない。

例えば、平山城児氏は、「全体の歌の配列の意味合いを、しかつめらしく論じたてること自体がナンセンス」(『鷗外「奈良五十首」の意味』)であるとす。また、小堀桂一郎氏は、「互の脈絡も順序もなしに、唯雑然と取り集めた百首であつて、……必ずしも配列の順を追うて読むことを要せな

いものである」(『森鷗外 文業解題(創作篇)』)とする。

これらの見解に対し、小平克氏は、「我百首」は鷗外の体験的事実を詠ったものであり、「舞姫事件」を背景とする百首全体が一体となった作品であるとの新説(『森鷗外「我百首」と「舞姫事件」、同時代社)を提示した。「舞姫事件」とは、鷗外がドイツ帰国後から二年間において生じた諸事件を一括して示す用語であり、小平氏と筆者が共同研究の過程で定義したものである(小平克『森鷗外論—「エリーゼ来日事件」の隠された真相』、おうふう)、(林尚孝『仮面の人・森鷗外—「エリーゼ来日」三日間の謎—』、同時代社)。この中には、「エリーゼ来日事件」、「赤松登志子との婚約・結婚・破婚事件」、「東京医事

新誌主筆罷免事件」、「医事新論創刊」、「小説『舞姫』の発表」などの一連の出来事が含まれている。この時期は、鷗外の一生で最も波瀾に富んだ青春の二年間であった。

第26首にある「Nischoreの酒」をインターネットで調べてみると、イタリアに「Nischore」という地名があることが分かる。小平氏の調査により、イタリアの作家アントニオ・フォガツァーロ（一八四二〜一九一一）の小説『昔の小さな世界』の中に、鷗外が詠った「Nischoreの赤ワイン」が登場することが判明した。鷗外は、この小説を読み、エリーゼと自身の関係を思い浮かべて、第26首を作ったものと考えてよい。東京大学総合図書館にある鷗外文庫の中に、フォガツァーロのドイツ語訳小説が所蔵されているのを、筆者は確認した。その表紙を図1に示すが、「鷗外蔵書」の朱印が押されている。

図1 独訳小説『昔の小さな世界』の表紙



鷗外が引いたと思われる赤鉛筆によるアンダーラインが所々にあるが、初出の人名部分に主として引かれていた。作者 Antonio Fogazzaro の写真を図2に示す。

図2 アントニオ・フォガツァーロの肖像



「我百首」第26首と関係のある箇所は同書65頁に、「Der Wein von Nischore, rot und durchsichtig wie Rubin, süß und stark, besanftigt und streichelte milde die Eingeweide des ungeduldigen Herrn Giacomo, ……」とある。すなわち、「ルビーのように赤く透きとおり、甘くて強いニシヨレーエのワインが短気なジャコモ氏の五臓六腑を落ち着かせ、穏やかに刺激した……」とあり、まさに「すきとほり眞赤に強くさて甘きNischoreの酒」は、この箇所が参照されていることが明らかである。主人公フランコは、両親を亡くして侯爵夫人である祖母に育てられたのであるが、祖母の反対を押し切って密かにルイーザと結婚式を挙げた。そのときの祝杯の酒が、

このNischoreのワインであった。鷗外の母峰子によって心ならずも帰国させざるを得なかったエリーゼと密かに酌み交わしたワインを、小説の主人公と重ね合わせ、結婚式での祝杯として思い浮かべていたのかも知れない。

いずれにせよ、エリーゼと鷗外は、相思相愛の仲であったことには間違いない。彼女は鷗外が忘れられずに後を追って来日したとか、鷗外は富豪の息子であると思いついで金をせびりに来た、といったこれまでの定説は誤りであると考えてよい歌である。第26首を例に取ったが、「我百首」は「舞姫事件」とくに「エリーゼ来日事件」を前提にしないかぎり、解釈不能である。また、フォガツァーロの小説が、「我百首」の中に生かされていることを見ることにより、鷗外の作品制作過程の一端をうかがうことができた。

鷗外文庫には、和漢書一五九二四冊、洋書二六八一冊が納められており、鷗外はこれらの膨大な文献に目を通して、作品の中に生かしているものと思われる。

鷗外文庫の前に立ったとき、図書購入に費やした膨大な費用を思い浮かべるとともに、それらを読破し、自家薬籠中のものとした「本の虫」鷗外の姿が偲ばれ、畏敬の念に思わず襟を正した。

森鸥外記念会通信

No.156 秋

▽「通信」二五七(冬)号原稿募集△

「通信」二五七号は二月末に発行予定ですので、遅くとも十二月中旬までにお届けください。字数三千字程度であれば短いものでもけっこうです。ご投稿をお待ちしております。

【編集後記】

記念室の活動が再開して半年が過ぎようとしています。「総会」「鷗外忌」、「講演会」と前半の大きな行事を無事に終えることができました。

記念室への来室者も多い日には四〇〇名を越す日もありました。私ども事務局スタッフも慣れないところが多々あり、来室者の方の御要望に十分お応えできないことがありました。反省点も多くありました。

これからも記念室の運営体制を整えていく努力を続けてまいりますので、宜しく御指導、御協力くださいますようお願い申し上げます。

森鷗外記念会通信

No. 156

発行 平成十八年十月三十一日

(年四回発行・四・七・一〇・一月発行予定)

編集責任者 倉本幸弘

発行所 森鷗外記念会

郵便番号・一一三—〇〇二二一

東京都文京区千駄木一—二三—四

電話 〇三—五八三四—〇一五六

振替口座・〇〇一六〇—一—六六一六四四